

【要旨】

メディアアート修復現場における国際的課題の解決法についての考察 -国内におけるナム・ジュン・パイク作品の修復事例を通じて-

美術研究科 先端芸術表現専攻

後期博士課程 3年 中川陽介

【研究内容】

本稿は、筆者が 2006 年から関わってきたナム・ジュン・パイク作品の保存修復の実践とリサーチを基に、未解決の課題に対する新たな手法とその意義を明らかにするものである。対象とするのは、パイク作品における保存修復論であり、芸術家ナム・ジュン・パイク研究とは異なる視点を取る。

主な事例として福岡地所所蔵《Fuku/Luck, Fuku=Luck, Matrix》(1996) および国立国際美術館所蔵《Cage in Cage》(1994) の二つの作品を取り上げ、それぞれハードウェアとソフトウェア両面の修復課題について論じる。《Fuku/Luck, Fuku=Luck, Matrix》にて行われた映像出力系のコントローラー修復のためのリバースエンジニアリング、《Cage in Cage》に対して実施したアナログ映像信号の真正性に関する検証は、それぞれ国際的な保存修復シンポジウムで指摘される問題でありながら 2024 年時点で実践例の少ない領域であり、メディアアートの修復技術に新たな視座をもたらす事例である。パイクは同名作品や類似シリーズを複数制作したため、素材や技術ごとに分類することで問題点や修復手法を系統的に整理することが可能である。

また、筆者は国内におけるパイク作品修復担当者および識者へのインタビューを通して、自らの修復手法の有効性を検証した。特にリバースエンジニアリングによる基板修復については、工学エンジニアやソフトウェアエンジニアへの聞き取りを行い、未通電電子機器の保存可能期間、半導体不足による今後の影響、回路設計と映像出力の関係性といった、美術修復分野では議論されにくい技術的側面を明らかにした。また、長年パイクの制作を支えた阿部修也氏へのインタビューも行い、修復手法の実効性やリスク評価について、オーソリティの見解を得た。修復倫理については、チエザレ・ブランディによる「可逆性」

「判別可能性」「適合性」「最小限の介入」という基本原則を踏まえつつ、メディアアート特有の事情に即した再検討を行う必要性を指摘する。ビデオテープやデータフォーマットといったメディアにおいては、担当技術者の専門分野によって「可逆性」「適合性」の解釈が異なることがあり、また新技術により従来不可逆と考えられた操作が可逆化可能となる事例も出てきている。このため、特に長期保存を見据えた場合には、修復現場での具体的なケーススタディに基づき倫理原則を柔軟に適用する議論が求められる。さらに、メディアアートの修復においては美術以外の分野の専門家との協働が不可欠であり、そのための資料化や修復記録の実践についても述べる。

本稿ではさらに、2032年のパイク生誕百周年を見据え、修復後の維持管理、つまり「修復完了後の修復」の問題にも言及する。《Fuku/Luck, Fuku=Luck, Matrix》の修復は2021年に完了したが、以降もブラウン管モニターの修理・交換が継続しており、今後の代替技術の検討が進められている。本稿で提示した《Fuku/Luck, Fuku=Luck, Matrix》のためにリバースエンジニアリングで再現した基盤は、他のビデオウォール作品にも適用可能である。その所在と保存状況の調査も含め、将来の修復に向けたアーカイブ形成の重要性について提言を行い、まとめとする。